

特 集 「編集委員今年の抱負 2009：経系から横系まで」

インタラクション研究 meets 感性工学？



小松 孝徳

信州大学ファイバーナノテク国際若手研究者育成拠点

私事ではあるが、2007 年の 11 月、公立はこだて未来大学から信州大学ファイバーナノテク国際若手研究者育成拠点に異動した。この仰々しい所属の名称のおかげで、行く先々で「なんでファイバーなん?」、「あれっ、ナノテクなんかやってたの!」のように驚かれることが多い。そんな「ファイバーナノテク」なところに所属しながらも、研究内容としては今までどおり、人間の認知的特性を把握しながら HCI, HAI などのインタラクションを考察するような研究を行っている。

信州大学には、国立上田蚕糸専門学校を前進とした現在日本で唯一の繊維学部が存在している。そして、その繊維学部を構成する学科の一つとして「感性工学科」がある（近年の改組により「創造工学系感性工学課程」と名称を変更）。この学科では、直接的にファイバや繊維に関する研究をしているわけではないものの、それらの製品を使用するのは人間であるという視点に立った研究、例えば衣服の着心地評価、新幹線のシートの座り心地評価、被服のデザイン評価といった研究が数多く行われている。これらの研究の根底にあるのは「人間がどのような状態にあるのかということ」を把握し、人間にとって心地良いものをつくってほしい」という考え方である。よって私の研究も、ある意味「人間にとって心地良いインタラクションの実現」を目的としているため、なんとか所属の一員として受け入れてくれたのではと思っている。それよりも嬉しい誤算だったのは、感性工学を学んできた学生にとって、私の行っているインタラクション研究は非常に斬新に見えるらしく、授業などで自分の研究を紹介した際の反応が良いことである。

正直、現所属に異動してくるまで、感性工学に関しての正確な知識は私にはなく、感性工学とは私の行っているようなインタラクション研究とは異質の人間工学ベースのお堅い研究分野であるという漠然としたイメージしかなかった。そこで「感性工学」とは何ぞや、と思いその意味を調べてみると、「人間の感性やイメージを物理的なデザイン要素に翻訳して、感性に合った商品や設計するテクノロジー」ということであった。しかしこれでもよくわからない。そのわからなさの理由は「感性」というコトバに起因しているに違いないと考え、さっそく「感性」というコトバの意味を調べてみると「高速で行われるところの帰属要因ならびに処理過程に関する情報

の選択あるいは統合に対する無自覚性を特徴とする処理に対する能力で、主に評価の形で表現されるもの。また、無自覚的・直感的・情報統合的に下す印象評価判断能力」ということであった。心理学的なコトバが並んでいて非常に難解な説明であるものの、都合良く解釈するならば、これは私が常日頃から抱いている「人間の直感的認知特性の把握」ということと、あまり意味が変わらないという気がしてきた。

先にも述べたように、感性工学であっても私の研究であっても、その根底にある考え方は「人間がどのような状態にあるのかということ」を把握すること」がそのスタートラインである。しかしその一方で、感性工学と現在私が行っている研究の動機や方法論などは大きく異なる部分が多いのも事実である。特に近年では、同じような研究をしていながらも、自らの分野でオーソライズされた方法論を踏襲していなければ、異分野のものを徹底的に排除してしまうような雰囲気や少なからず存在し、そのことが互いの分野を排除し交流をも阻害していると考えられる（感性工学分野とインタラクション研究分野にて、このようなせめぎ合いが生じているかは定かではない、というよりも、これまで接点すらなかったようにも思えるが…）。

そこで本年度の私個人の目標としては、このように基本的な考え方を共有できると考えられる、感性工学分野の人々を人工知能分野、特にインタラクション研究分野に取り込んでいくことを検討してみたい。具体的には、これらの両分野を紹介したり比較したりする特集記事や誌上企画を立てることで、異なる分野のファーストコンタクトをどんどん発信していきたいと考えている。また、AI 学会に関連した全国大会やシンポジウムなどでのセッションを通じて、互いが互いの研究に関する情報を得られるような機会を設定できればと考えている。

このような交流を通じて私が期待しているのは、感性工学とインタラクション研究との交流によって、互いが相補的に競い合い発展していくことで、感性工学やインタラクションを学んでいる学生の視野が広がっていくことである。このような新しい試みは、きっと学生にも新しい動機を与え、将来的には私達には思いもつかなかったような新しい研究の方向を示してくれるようになるのではと期待している。